

## 復興への歩み

岩沼市立玉浦中学校

三年 櫻井 未夢

三月十一日東日本大震災。これは、私達が決して忘れてはならない出来事です。

当時小学校四年生だった私は、その時、自分の身に何が起きているのか全く分かりませんでした。おやつを探しに台所に行ったその時、ものすごい揺れに襲われました。食器棚の食器は次々と割れ、天井の一部は落下し、冷蔵庫の一部は今にも倒れてきそうな勢いでした。ただただ恐怖に抱きかかっていた。

その後、私達家族は急いで名取市にある叔父さんの家へ避難しました。津波が到達したのは、私達が叔父さんの家に着いた、丁度その時でした。携帯のテレビで、仙台空港の映像が流れているところでした。初めて見た津波の威力というのは、画面越しでも伝わる驚異的なものでした。

(家はどうなってしまったのか。)

(皆、無事に避難したのか。)

(友達は大丈夫なのか。)

叔父さんの家は沿岸部から離れたところにあつたので、津波の被害はありませんでしたが、津波の映像を見た瞬間、ここにも来るんじゃないかと不安と恐怖でいっぱいでした。

私が住んでいた自宅は、海から約五百メートル。ちょうど現在の千年希望の丘辺りにありました。津波から約二週間後、立ち入り禁止が解除されてから、すぐ家族と家の様子を見に行きました。

沿岸部に近づくにつれて、車の窓から見える外の様子はあまりにも残酷なものでした。目の前に見えている光景が信じられませんでした。自宅はまるで、昔から何も無かったかのように、あとかたもなく流されていました。そこら中に落ちていた写真やくつ、衣類、車：時に動物の死体があったり、皆、言葉にならない状態でした。避難してから約一か月間叔父さんの家で生活しました。名取市役所で、おにぎりや味噌汁、水をいただいたり、近くの洋服屋さんから衣類をいただいたり、まだ幼かった従兄弟にミルクのお湯を分けて下さった女性の方などこの時にとても「助け合い」という言葉を学びました。また、今までどれだけ食事に恵まれていたのか、身にしみて感じました。

避難生活は毎日不安でいっぱいの日々でしたが、その中で学んだこともたくさんありました。人と人との助け合い、食事への感謝、思いやりの心、まだまだたくさんあります。その後も、私達は世界中からたくさんの方々の支援をいただきました。高知県や大阪府へ無料招待していただいたり、ランドセルや文房具、生活用品、食べ物、またたくさんの方々の方々にも数えきれないほど、心の支援をいただいたりしてきました。

そして、仮設住宅が出来て、そこで三年間暮らしました。本当は住めるといっただけで感謝しなければならぬのに、現実を受け入れられない自分がいました。床はきしむし、夏は暑く、冬は寒く、隣の人の声は聞こえるし…。

(どうしてこんなことになったんだろう…。)

(家へ帰りたい。)

(こんなところ嫌だ。)

私の頭の中は正直、不満でいっぱいでした。

しかし、女子プロレスラーの方々や、お笑い芸人さん、スポーツ選手など、たくさんの方々が励ましに来てくれて、とても元気づけられました。気持ちもだんだんと落ちついてきて、三年目には仮設での生活にも慣れてきました。

現在は玉浦西地区に自宅が完成し、家族四人で幸せに暮らしています。私は今年、高校受験生ですが、自分の部屋でゆっくり勉強できるのが嬉しくてたまりません。ずっと欲しかった自分の部屋でした。自分の物を自分の好きなところにかざれるというだけで本当に嬉しいのです。

地区内には四つの公園があり、その公園の頭文字をつなげると「たまうら」になります。名前は玉浦中学校の生徒が考えました。そして私は、その中の一つ「うぐいす公園」の題字を書かせていただきました。ずっと将来まで残る私達の公園の文字を代表して書かせていただけたことを大変光栄に思っています。

私は将来、看護師になりたいと思っています。小さい頃からの夢でしたが、震災を通して人の役に立つことのすばらしさを改めて深く感じ、より看護師になりたいという思いが強くなりました。もしも、この玉浦を離れることになったとしても、玉浦が私の故郷であることを誇りに思い、この玉浦で経験したこと、学んだことを決して忘れず、まっすぐ前を向いて歩いていこうと思います。

# 震災から五年目を迎えて

多賀城市立東豊中学校

二年 佐藤 琴乃

「あんな光景、見ないで済んだのは絶対に幸せだ。」  
と、実際に津波を見た父が言った言葉が、今も心に残っています。

大震災から五年目を迎えた率直な感想は、「もう五年も経ったなあ、早いなあ。」というものでした。津波で家を流された親戚も震災から五年目の今年に、家を建てました。それまでの仮設住宅での生活でも明るく笑顔でいて、強いなあと思っていました。それでも、家が新しくなって仮設住宅を出てからは今までより自然な笑顔で笑うようになりました。やはり「自分の家」というのは違うのだなと思うと同時に、家を失い、現在も仮設住宅での生活を余儀なくされている人も多くいるということ忘れてはいけないのだと感じました。震災の後、私の家は、電気は止まっています。が、地震の被害をあまり受けず、その時の私は、今、世の中がどれほど大変なのかということに全然理解できていませんでした。地震の被害の大きさはつきりと認識できたのは、やっと電気が復旧した頃のことでした。テレビをつけて呆然としました。津波で街が、車が、全てのものが流されていく映像が、どこのテレビ局でも繰り返し放映され、日に日に増え続ける行方不明者と死者数に圧倒されました。「なんだこれ、大変な災害だ。」ということは小学三年生の私にでも分かりました。

東日本大震災を経験して、人のあたたかさを感ずりました。地域の人たちと協力し助け合ったこと、毎日名前も知らない人たちがたくさん家に来てくれて助けてくれたこと。山形の友達が持つてきてくれたおにぎりには、一つ一つに「頑張れ！負けるな！」とメッセージが書いてあったこと。全国の友達から届いた段ボールには、あたたかいメッセージが寄せ書きしてありました。「頑張れ！」の一言があんなにうれしく感じたことはありませんでした。届いた段ボールは二部屋がいっぱいになるほどで、高く積まれた物資を見るたびに、私はたくさんの人に支えられているのだと思います。人とのつながりの大切さ、どれだけ人に支えられているかということを通して改めて感じることができたのです。私も誰かを助けてあげられる人になりたい、そう思っています。

そして、あの震災で「あたりまえ」のありがたみを知ることができました。あたりまえにつく電気が使えなくなったら、私の家の物は何も動きませんでした。料理もできない、寒い、暗い、何より情報が入ってこないなど、あたりまえにできていたことのほとんどすべてができなくなりました。震災の時、初めて知った「あたりまえのありがたみ。」そして、電気が点いた時の、水が出た時のあの感動を、忘れてはいけないと思います。

五年の月日が経ち、あの時の大切な思いをみんなが忘れかけているのではないのでしょうか。あの時よりも、便利になっていく生活の中で、みんなが心に留めておくべきことを忘れかけているように思うのです。この便利な生活がとても幸せなことだと。そして、この震災の経験を後世に伝えていくのが、私たちの大切な仕事だと思っています。

す。

先日、戦後七十年の特集記事の見出しに、「戦争の体験、伝え方に悩む」と書いてありました。戦争を体験した人たちも八十歳、九十歳ぐらいになり、戦争が風化してしまう恐れがあるという記事を読み、あの震災を体験し「ああ、怖かった、大変だった」で終わらせてはいけなくと強く感じました。後の世代に「震災の記録」として津波の高さ、震度、マグニチュードが：ということだけが伝わるのでは駄目なのです。体験した私たちにしか分からないことを伝えなければならぬと思います。こんなに辛い思いをした、住み慣れた町をのみこんでいった津波の恐怖を、こんなにたくさん助けてもらった感謝の気持ちを電気がついた時の感動を、次に同じような災害が起きた時、被害を最小限に抑えるために事実をしつかり伝えていくことが、私たちにできる大切なことなのです。あの時、自分が体験したことを思い出すこととしても、なかなかはっきりと思いつくことはできません。それはもしかしたら、五年経った今、私の中で震災が風化し始めているのかもしれない。

書きながら振り返った東日本大震災は、本当に大変で言葉でなんて言い表せないくらい辛い思いをみんながして、でも多くのことを考えさせられる経験だったと思います。そして、津波で殺風景になった気仙沼を見たときのあの悲しみ、寂しさなどは忘れることはできません。

普段の何気ない日常、友達、仲間、家族、人の命、これらはかけがえのないものです。

私の中で震災を風化させることなく、今後の生き方について深く考えていきたいと思います。

## 悲しみを繰り返さないために

七ヶ浜町立向洋中学校

三年 岸柳 ひな

三月十一日。忘れもしないあの震災は、私たちの笑顔、家族が待つ家、通いなれた学校や職場などの大切なものや場所、そして大切な人の命までも奪い去っていきました。

当時、私は福島県に住む小学四年生。合唱部に所属しており、友達と一緒に練習に向かう途中のことでした。二時四十六分。大地が裂けるようなものすごい音とともに、長く大きな地震が私たちを襲ったのです。立っていられないほどの激しい揺れと、言葉も出ない恐怖を、私は一生忘れることはできません。もつれる足で何度も転びそうになり、やっとの思いで帰宅すると、家の中は物が散乱し、メチャクチャでした。停電にはならなかった私の家では、テレビに映る映像を見ながら、心配していたことがありました。それは、海の近くで働いている父のことと、宮城県の海沿いにある町に住む祖父母のことでした。家族の無事を確認するまでの時間はとても長く感じられ、計り知れない不安に胸が押しつぶされそうでした。だから帰宅した父の顔を見た時は、ほっと安心するあまり、その場に座り込んでしまいました。やがて祖父母の安否を確認できると、ようやく現実を受け止めることができたように思います。

しかし翌日、私たち家族の生活はさらに一変しました。それは、福島第一原子力発電所爆発の知らせです。それと同時に避難を命令され、まさに

着の身着のまま家を出ることになったのです。宮城県塩釜市に住む親戚の家に着くと、そこには自宅を津波に流された祖父母も避難していません。周りの大人も私もみんなが先の見えない不安を抱えています。震災前の日常がどれだけ幸せだったのだろう……。長引く避難生活の中で、私は何度も福島での生活を思い、元に戻る日を願いました。ですが、両親は家族で福島に帰ることをあきらめました。仕事が再開した父だけが福島に戻り、私は避難先の学校に転校することになったのです。

極度の緊張症だった私は、新しい学校で周りの目ばかり気にしてずっと座っていたり、登校してもすぐに家に帰りたくなったりしていました。でも、クラスの人に声をかけてもらいうちに、少しずつ友達ができるようになり、中学生になった今では、学校が楽しいと思えるまでに変わることができました。

ですが、変わらない思いもあります。それは福島島の友達に会いたいこと、そして合唱部のみんなでもう一度歌いたいという願いを持ち続けているこの思いです。避難のために日本全国に離ればなれになってしまった現在、連絡がとれる友達はたった一人となりました。離れて住む友達とは、文通でお互いのことを語るしか手段がありません。震災は私から仲良しだった友達や家族と一緒に過ごす日々、心から合唱を楽しんでいた日々を奪いました。

私に限らず、この震災を経験した人は、それぞれとても辛い思いをしてきたに違いありません。このような経験した私だからこそ、現在も世界中で起きている災害等に苦しむ人々をテレビや新聞

で見るたびに、他人事とは思えなくなりました。被災地と言われるこの地域が復興するまでには、まだまだたくさんの課題が残ります。何をどうすればいいのか、まだ今の私にははっきりと分かりません。でも、地域の力、人の力になることなら、どんな小さなことでも積極的に行動していきたいと思っています。この数年の間に、地震をはじめ多くの自然災害が各地で発生し、私たちの暮らしは常に災害と隣り合わせと言ってもおかしくありません。だから、私たちはもしものときのために様々な対策をとっておかなければなりません。一人ひとりが意識することで、被害が最小に食い止められると思います。震災を経験した私たちの使命は、このようなことがあったことを後世へ伝え、被害や心の傷を減らすことだと思います。

## 「震災から五年目を迎えて」

大郷町立大郷中学校

三年 藤倉 朱里

東日本大震災では多くの人が犠牲になりました。津波による建物の損壊、道路の寸断、鉄道などは長い間復旧が困難になるほどの被害を受けました。あれから四年、被災地では前を向いて歩いてこうという人もいれば、あれから時間が止まったままという人もいます。まだ行方不明の方もいて、ニュースを聞く度に心が痛みます。復興が進んだと口では簡単に言えますが、ここまで復興するにはとても大変な苦勞があったと思います。

私も四年前の三月十一日、東日本大震災を経験しました。当時小学校四年生の私は何が起こったのか分からず、ただ教室の机の下に隠れて泣いていました。家に帰ってから余震が度々起き、真っ暗な部屋で不安な夜を過ごしたことを今でも覚えています。私の兄は仙台港の近くで働いていました。大津波警報が出ていることを知り、同僚と車で逃げました。渋滞で全く進まず止まっていると自衛隊の方には

「車を置いて逃げて下さい。」  
と言われ、ふと後ろを見ると津波がそこまで迫っていたそうです。走って逃げ、兄は助かりましたが、あと一歩逃げ遅れていれば津波にのまれていたかもしれません。兄はやつとの思いで逃げてきたと私に話してくれました。

大郷町では大きな被害はありませんでしたが、ライフラインは止まり元の生活に戻るまでには時

間がかかりました。

私は中学校三年生になり、防災に対する考えが変わってきました。私の住む大郷町は日中、大人が町外に出て働いている家庭がほとんどです。だから、もし日中に災害が起こったら、近所に住むお年寄りや小さな子どもを守るのは私たち中学生ではないかと思えます。私たち中学生は大人ではないけれど、子どもでもないのです。私たちが自分の身を自分で守る力や判断する力をつけていけば、地域の人と協力して大郷町を支える一人になれるのではないかと思えます。

いつ、どこで災害が起こるかは予想できないことがほとんどです。災害が起きた時、自分の命を守る。自分の命を守るためにはそうすればいいのか。二次災害についてはどうか。避難訓練などで想定しているシチュエーションとは違う場面での災害が起こった時に焦らず正しい判断ができるか求められてきます。また、東日本大震災では多くの人が避難所生活を強いられました。近所の人とコミュニケーションをとり、集団行動ができるということも大切だと思えます。そう考えると、学校の集団生活の中で学んでいることや地域の人とコミュニケーションをとることはとても大切だと感じています。朝の何気ないあいさつや少しの会話でもつながりを作っておくことによって、災害が起きた時に助け合うことができます。より近くで生活している人と関係をつくるのが大切だと思います。

大郷町では、各家庭に一つ、防災無線がありません。防災無線では、町の情報を町民に知らせたり、災害があった時には避難情報や被害の状況を伝えています。東日本大震災の際にも迅速に情報を知

らせていて、とても役に立ちました。

大郷町では、避難指示や警報が出ていることを防災無線で知る人が多い状況です。防災無線は町民によって自分の命を守るためのとても大切なものです。防災無線をしっかりと聞き、災害に備えることが必要だと思います。

私の将来の夢は医者になることです。私は四年前のあの震災の中で生かしてもらったこの命を誰かのために使いたいと考えています。そのため災害に関する知識を身につけておき、少しでも命を落とす人が少なくなるように、震災を知らない世代にもこれから伝えられるようにしたいです。これからは、防災に強い町にしていきたいです。日々災害に備えておくことで被害を減らすことができ、防災につながります。私も今からこのことを実践していきたいです。

# 辛い日々を支え合う

富谷町立富谷中学校

二年 船島 さき

東日本大震災から五年がたちました。毎日が楽しかった日々から一変、毎日が辛い日々へと変わりました。三月十一日、今までで感じた事のない大きな地震が起こりました。当時私は小学生で、放課後友達と校庭で遊んでいました。校舎の壁がガタガタと落ちて、とても怖かった事を今でも覚えています。数分後、母が迎えに来てくれたので家に無事に帰ることができましたが、家の中には、棚から本やノート、教科書、食器などが落ち、足の踏み場もない有様でした。

家族四人がそろってホッとしていた時、私たちはふと祖父と祖母の事が気になりました。父は信号がついていない真つ暗な道路を通り祖父、祖母の家へ向かいました。数時間後、父は、祖父と祖母を連れて帰ってきました。「皆無事だったんだ」と安心しました。それから、停電で電気もつかない、水も出ない日々が続きました。電気も水も戻った時、私は毎日電気がついたり、水が出たりすることのありがたさを感じることができました。それから家の片づけをして、祖父と祖母の家も片づけることになりました。もともと、古かった祖父母の家は、震災で、住めるような状態ではなかったのです、これを機会に私達の住んでいる家に引越して来ることになりました。

しかし祖父、祖母が私達の家に来てから何ヶ月かたった頃、いつもは美味しい料理を作ってくれ

たり、ニコニコ笑顔で鼻歌を歌ったりしていた祖母が、急に料理も作らず、鼻歌を歌う事もなくなりました。ずっと黙って座ってばかりになっていました。

祖母の異変に気づいた母が病院へ連れて行くと、祖母は「鬱病」になっていたことがわかりました。震災とその後の環境の変化が原因だったそうです。その事を聞いた時、私は言いようのない悲しみで心が一杯になりました。あの元気だった祖母がまさか病気になる、こんなに暗くなってしまった、私はこれからどうすればいいのかと。

それから祖母は段々悪化していききました。薬を飲むのも、お風呂に入るのも、ご飯を食べるのも嫌がるようになり、目つきも険しくなっていきました。そんな祖母を見ているのは本当に悲しいことでした。学校で友達といえる時は笑顔でいられるけど、家に帰り、夜になると独り、二階へ上がり泣く日々が続きました。

でも一番辛かったのは病気になるってしまった祖母だったのだと思います。病気の人は病気になるようになってしまったわけではないのに、今までどおりの自分ではなくなつて、やりたいことも出来なくて辛かったはずで、そして、私たち家族は、祖母が病気だと分つてから皆で支え合いながら祖母のお世話をしました。私もお風呂の介助をしました。その時、母に「手伝ってくれて本当に助かるよ、ありがとう」と言われて、大変だったけれど、その中に「私でも役に立つ事が出来るんだ」と喜びを思い出せました。

でも、時々、祖母にきつくあたってしまうことがあります。私の言うことを聞いてくれず、怒ってしまったり、強い言い方になったりしてしま

時など、自分でも「しまった、おばあちゃん病気のなに」と自己嫌悪に陥ったりします。

私は震災が起きていなければ祖母が病気になる事がなかったのに、こんなに辛い思いをしなくてよかったのに、と今でも思っています。でも海沿いの人達は津波が来て、家族が亡くなってしまうなどもっと辛い思いをしていることでしょう。

私はこれからまだ治っていない祖母を支えていくために、途中くじけそうになってしまふ時があつても、皆が笑顔になる日を願って頑張ります。悩んでいる人、困っている人を見かけたら決して見捨てずに、助けてあげる。人間は一人では生きていけない。だから皆で支え合つて生きていきます。

## 今、思うこと

大崎市立古川北中学校

三年 戸邊 優希

「ガタガタガタツ」「地震だ。机の下に隠れて。」私は、今でもあの時のことを鮮明に覚えています。本が床に散乱し、水槽はひっくり返り、もうめちやくちゃ。頭の中は混乱し真っ白。必死に、机の下から投げ出されないように、机の脚を握っていました。揺れがおさまり、机の下から出てみると、ついさっきまで、他愛もない会話をしながら笑っていた教室が、全く別の空間となり、面影すらありません。何が起こったのかもよく分からないまま、ランドセルもなにも持たずに避難しました。そして、ここで初めて、震源は三陸沖、マグニチュード九・〇の大地震だということを知りました。私はすぐに三年前に起きた岩手・宮城内陸地震のことを思い出し、また地滑りが起きるのかと心配になりました。その後私の考えをはるかに超えることが起こるなど知る由もありませんでした。体育館に避難してから一時間くらい経った頃、母が迎えにやってきました。私は、余震の揺れを感じながら家に帰りました。空は黒く不気味な雲に覆われて、外は雪がちらつく春浅い日の午後でした。

「大津波だつて。」私は、あの穏やかで豊かな三陸の海が牙をむくなど、想像もしていませんでした。そして、初めて聞く「大津波」という言葉に、何がなんだかよく分からなくなりました。私は小さな頃から海が大好きで、週末にはよく

祖父母と共に松島や塩釜などに釣りに行っていました。しかし、私はあの日を境に海へは行かなくなりました。

電気が復旧してからテレビをつけると同時に、黒い濁流が車や家などを町ごと飲み込んでいく映像が流れて、私は言葉にできない衝撃を受けました。私の大好きな海がこんなふうになるなんて、考えたくありませんでした。そして、母の言葉を聞いた時、一人のおばあさんのことが頭をよぎりました。

おばあさんとは、八十歳をこえてなお旦那さんと一緒に牡蠣の養殖をしている人です。おばあさんは、私に海のことを教えてくれたとても大事な人です。おばあさんは、無事だろうか。牡蠣や船はどうなっただろう。いろんなことが次々と頭をよぎりましたが、少し経ってから無事だと知り、心からほっとしました。しかし、海沿いにあった自宅は全壊。牡蠣も船も全部流され、がれきだけが残ったそうです。電話での彼女の声はトーンが低く、元気がないようでしたが、最後には「いつまでもよくよしていられない」と、仰るのです。電気が止まった、水が出ない、それを大変だと言っている私は、とても驚きました。本当に強い心の持ち主だと感じました。しかし、今思えばあれは彼女の幼い私に対する気遣いであり、どん底から這い上がるうとする決意の言葉だった気がしません。震災から数日もしないうちに、日本各地はもちろん、世界のあちこちから支援物資が多く寄せられました。物資だけでなく世界各国から災害救助隊も来てくれて、救助活動やがれきの撤去作業などもしてくれました。名前も知らない大勢の人たちが、やはり名前を知らない人たちを支えてい

る。私は人間の優しさに、強く感動しました。そして、今年の四月二十五日、ネパールでマグニチュード七・八の大地震が発生しました。日本の自衛隊も現地を訪れ、医療活動や救助活動に尽力しました。同じ日本人として、恩返しをしているようで、とてもうれしい気持ちになりました。

大震災では、原発事故も起こりました。周辺は放射線物質で汚染され、住民は避難を余儀なくされました。今から七〇年前の広島と長崎も同じ放射線物質によって多大な被害を被りました。人々は深い悲しみと行き場のない怒りを感じながらも前へ進み、今日まで歩んできたのだと思います。何一つ悪いことなどしていないのに、追われるように故郷を離れ、生活の基盤すら不安定な毎日。自然災害がもたらす人災の恐ろしさを感じます。助け合うことも傷つけ合うことも、同じ人間のことなのだと思うと、つらい思いをしている人を忘れてはいけなそう思いました。

東日本大震災からもうすぐ五年。今、私たちは何ができるのでしょうか。「天災は忘れた頃にやってくる」いつ災害が起きてもいいような心構えと、それに対する準備を日頃からしておく必要があります。そして、大震災のこと、人々の悲しみ、つらさ、助け合った人間の優しさや強さを風化させず世界中の人たちに知ってもらおうことが私たちの役目だと思います。「大震災を忘れない」それが何よりの防災であり、私たち若者の使命だと考えています。

# 震災から五年経った今私は

加美町立新田中学校

二年 大戸 寧々

東日本大震災から五年経った今私は、中学二年生になりました。毎日楽しく過ごしています。あの震災があった日はまだ私は小学三年生でした。そしてまだ学校で授業をしている時に地震が起きました。私の頭の中は「怖い。お父さん達は大丈夫かな。」でいっぱいでした。お父さんが迎えに来てくれた時は無事だということが分かり、涙が出ました。そして家に着き、入ると水が出るけど電気がつかないということを知りました。あの時は三月でまだ雪も降っていて、ヒーターが使えなかったのが寒かったです。夜になって、家は真っ暗になりさらに寒くなりました。そして子供達でも避難させようということになり、私は三つ上のいとこと、三つ下の弟、お母さんと一緒に避難所に行きました。避難所には予備電力でヒーターがついていて温かったです。そして三日後くらいに家に戻りました。まだ電気はつかず、ろうそくやガスを使って過ごしました。またラジオでニュースを聞いたり、お風呂には入れないので沸かしたお湯で体を洗ったりなどそんな生活が続きました。二週間くらい経つとやっと電気が復旧しました。電気がついて嬉しかったです。私はテレビが好きなので、すぐにテレビをつけました。すると津波のことを報道していました。私はこんなにもひどいとは思いませんでした。また福島放射能のこともやっていました。私のいとこは福島県伊

達市に住んでいます。お母さんがいとこの家に電話をしたところ、水道水が飲めなくなったと聞ききました。私はいとこは大丈夫なのだろうかと思いましたが。そして家族で話し合っていて、いとこの家に水を持って行くとういうことになり、お父さんが水を届けに行きました。私もいとこに会いたかったけど、家族にだめと言われたのでまた今度会おうと思いましたが。そしてお父さんがいとこの家に水を届けると、お父さんから電話が来ました。そしてビデオ通話だったので顔を見て話せたので嬉しかったです。それから少し経ち学校が始まりました。久しぶりの学校生活、久しぶりの友達に会えてすごく嬉しかったのを覚えています。また私は、習い事で水泳をしていましたが、震災ですと水泳ができなくてまたできるの不安でしたが、また泳げることができて嬉しかったです。だけど、福島のことはいつも放射線を測る機器を持つていたり、あまり外に出ちゃだめなんだというのを聞いて、私は好きなことをまたできるように became したけど、いとこは好きなことをあまりできなくなつたんだなと思いました。私は福島に住んでなくて良かったなとたまに思うことがあります。本当はこんなことを思ってはだめだと思っていますが、好きなことをできなくなるのはいやだなって思いました。好きなことをできることに感謝しなければならぬと思います。

震災から五年経った今私は、「準備と感謝をしてこの震災のことを伝える」ということをしなければいけないと思います。

まず準備では特に、非常食などの生活に必要な物や避難訓練をしなければいけないと思います。もし東日本大震災のときみたいなきことがあったと

きに、食べる物が無い。だけどスーパーはつかえないとなつたら大変です。また避難するときに負傷したり、避難場所が分からなかったら大変なので、やっぱり準備をしなければいけないと思います。

次に感謝をしなければいけないと思います。私は今でも水泳をしています。震災のときは、スクールコースでしたが、今では選手コースになりました。そして県中総体に出ることができました。だけでもしあの時水泳ができなくなつたら、もう水泳はやめていたかもしれません。そして選手コースにもいけなかつたし、県中総体に出ることができなかつたかもしれません。だから今でも水泳を続けられて、県中総体に出れたことに感謝しなければいけないと思います。

次に東日本大震災でおきたことを人に伝えなければいけないと思いました。あの地震を知らない子供達に「こんな地震が起きたんだよ。こんなことはしちゃだめだよ。」と伝えなければ、もしかしたらあの時よりも被害が大きくなることもあるかもしれません。だからあの地震のことを伝えなければいけないと思いました。

私はこの三つは東日本大震災があつたからこそしなくてはいけないことだと思っています。またこの三つのことを皆さんにもしてほしいと私は思いました。

## 未来へ

### 色麻町立色麻中学校

二年 鶴谷 明樹

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、当時小学校三年生だった私は、帰りの会をするために教室にいました。突然の大きな揺れに驚き、とっさに机の下にもぐりました。柱がミシミシと音をたて、机の上のものが散乱し、あちらこちらから悲鳴も聞こえてきました。一旦おさまったかと思うと、また大きく揺れる。その繰り返しでした。しばらく続いた揺れがおさまったあと、一斉に校庭へ上ぐつのまま避難しました。みんな不安な様子で、泣いている人もいましたが、今になって思うのは、地震が起きたのが帰りの会の直前で、一人も外になかったこと、普段の避難訓練に真剣に取り組んでいたことが、不幸中の幸いだったということだと思います。特に、避難訓練の大切さを、この震災を通して、強く実感することができました。その後、家族が迎えに来てくれ、車で家に帰りました。私の家では、ガスや水道は使えましたが、停電していました。その日は、家族全員で非常食を食べ、こたつの中に湯たんぽを入れ、石油ストーブをつけたまま、居間で寝ました。しかし、私は、少しの揺れにも驚いてしまい、全く寝られませんでした。それから数日の間は、情報を得る手段がラジオしかなく、ラジオばかり聞いていました。そこで、悲しいニュースの合い間をぬっていつも流れていたのが、音楽でした。いつ電気が通るのか、いつ学校が再開して友達と会えるのか全

く分からず、不安でいっぱいだった私の心を、ラジオから聞こえてくる音楽は、少しずつほぐしてくれたのをよく覚えています。あれから五年たち、私は中学二年生となりました。総合学習の時間に、将来の進路を考えようと言われた時、最初はなりたいたい職業が思いつきませんでした。しかし、震災の時の経験を思い出すとともに、自分が今吹奏楽部に所属しているということから、「音楽に関係する仕事に就きたい。」と、強く思うようになりました。また、はつきりとこれになりたいという職業は決まっていますませんが、たくさんの方の気持ちを楽しくさせるような仕事に就きたいと思えます。あの日、ラジオで音楽を聞いて、元気をもらった時の気持ちを決して忘れずに、過ごしていきたいです。

また、昨年の五月に、ネパールで大きな地震が起きた時、私は緑化福祉委員会に所属していました。学校でも募金の呼び掛けを行いました。運動会の日に、保護者の方々にも募金をしてもらったことにしました。自分たちよりも大変な思いをしている人がたくさんいるという気持ちから、運動会当日は、恥ずかしがらずに、大きな声で、少しでも多くのお金が集まるように声掛けをしました。私がこのような気持ちになれたのは、東日本大震災の経験を通して、助け合うことの大切さを感じたからだだと思います。私の気持ちが伝わったのか、最終的に四万五千円近くの募金が集まりました。

このような震災の経験から、私が改めてとても大切だと感じたことがあります。それは避難訓練です。震災当日、クラス全員がけがなく、無事に避難できました。それは、間違いなく避難訓練の成果だと思えます。訓練をする機会は、限られて

いましたが、毎回「笑わない」「話さない」「放送をしっかりと聞く」などの注意点を心掛け、一人ひとりが、真剣な態度で取り組んでいました。これからも、避難訓練では、気を抜かず、真剣に取り組んでいきたいです。

あの忘れられない大きな災害から、節目となる五年目となりました。この五年間で亡くなってしまう人は、宮城県だけでも約一万人、行方不明者が約千二百人いることです。そして、いまだに仮設住宅で避難生活を続けている方も、決して少なくはありません。私は、このような震災の記憶は、風化させてはいけなと思います。震災を通して学んだことを、今後想定されている南海トラフ地震や首都直下型地震に備えるためにも、伝えていくことが必要だと思います。この震災で得られた多くの教訓を次に起きるかもしれない災害に生かしていけば、犠牲も必ず減るはずだと思います。

二〇一一年三月十一日、私はこの日に起こった災害をずっと忘れません。宮城県に生まれた者として、これからもいつも通りの日常を送れることに感謝をし、何事も恐れずにたくさん挑戦をしていきたいです。



## 震災から得たこと

栗原市立瀬峰中学校

三年 白鳥 華恋

私が、東日本大震災に遭ったのは、小学四年生でした。震災が起こった時、私は学校で大掃除をしていました。

大掃除も終わりに差し掛かり、みんなで雑巾がけをしていた時に地震が起きました。一瞬、何が起こったのかわかりませんでした。私は、避難訓練で習ったとおりに机の下に隠れようとして、ろう下に出していた机の下に潜り、じっと耐えました。中には、途中で泣き出してしまった女の子もいました。とても長い揺れで私もパニックと恐怖で泣きそうでしたが、先生方が支えてくださったお陰で冷静さを保つことができました。

無事に避難し終わり、先生が人数確認をしている時に、校舎の方から私達の学年の男の子、三、四人が歩いて来ました。その男の子達は、音楽室に先生から頼まれた物を取りに行った時に地震が起こり、あいにく、音楽室には身を隠す物がなく、ピアノの下に潜りこんでいたということを知り、驚きました。

避難した時、外は寒くて雪もちらほら降っていました。先生方は、私達のロッカーの中にあつたコートを急いで持ってきてくださいました。周りを見渡すと、心境のせいなのか、なぜかとても悲しい景色をしているように見えました。

私は、迎えに来てくれた祖父と一緒に家に帰りました。家に着くと、母の姿が見えました。母は、

家が心配なため地震が起きた後、すぐに会社から帰ってきたそうです。無事でとても安心しました。そして家の中へ向かうと、物のほとんどが床に落ち、食器も粉々に割れていました。倒れた食器棚が祖母の椅子の背もたれに、ぎっちり挟まつてとれなくなっていました。

だいぶ暗くなってきたので、棚にしまつてあつたろうそくを何本かつけました。そして、電気も使えないため倉庫から灯油ストーブを出してきて寒さをしのぎました。夜にも何回か余震が起こり、その夜は、あまり眠ることができませんでした。

次の日から、片付け、食料などをスーパーに買いに行きました。飲み物は、自動販売機で買っていました。ラジオからの情報に耳をかたむけ、とても膨大な被害をあたえていると知り、驚きました。沿岸部では、巨大な津波が押しよせ、家までもが流されたというニュースを聞き、とてもショックでした。

そして震災から数日後、電気もガスも水道も使えるようになり、とても嬉しかったです。私は震災以来、少しでも揺れると机の下に潜つたり外に出て頭をかかえてしゃがんだりしていました。あの震災以来、私にとって地震は、「怖いもの」に変わりました。今までは、強くなつたら避難していましたが、私の家の近くに橋があり、車が通るたびに「ガタン」という音がなります。その音さえも、恐怖に変わりました。

今では、そんなこともなくなり、少しの揺れにはあまり反応しなくなりました。けれどその慣れこそが危険だと私は思います。少しの揺れでも「逃げた方がいいんじゃないか」という危機感を持たなければいけないと私は思います。危機感を持って

ば、身の安全にもつながります。

他の地方から、ボランティアとして来られた方には、とても感謝しています。ボランティアの方のお陰で、宮城県が復興していくことができました。

また、この震災から、助け合いの大切さを改めて学びました。震災の時、足の不自由な曾祖母、祖母を心配してはだして駆け付けてくださった近所の方がいたという話を祖母から聞き、近所どうしの助け合いは大切なものと改めて感じさせてくれた話でした。私も人に心配りができる人になりたいと思います。そのため、どんな時でも、冷静に行動できるようになりたいです。

震災から今年で五年目になります。私は、東日本大震災がだんだんと忘れられてきているように感じています。どうかお願いです。この震災を忘れないでください。こんなにも悲しい震災を。そして、「逃げる」という気持ちをもってください。「より高い場所へ」という言葉を。東北地方だけでなく、日本全体、世界中の方にも知ってほしい。そして、忘れないでほしい。いつか、世界中の方が、この日に黙とうをささげるようになることを願います。

# 感謝の気持ち

石巻市立青葉中学校

二年 鈴木 穂香

私はあたりまえのように命を授かり、あたりまえのように生きてきました。

家族や友達と、笑い、泣き、怒り、喜び…、全てがあたりまえの日常。しかし、あの恐ろしい震災があまりにも多くのものを奪い、私の考えを一変させたのです。

私は、両親と祖父母、妹、弟の七人で暮らしていました。毎日がとても楽しく、笑顔の絶えない家族。あの日も、あたりまえの一日を過ごすはずでした。

小学三年生の時に起こった大きな揺れ。そしてその後、襲いかかってきた、巨大津波。私と母は奇跡的に助かることができましたが、この巨大津波は大切な家族、四人の命を奪っていきました。正直、今でも震災のことは、あまり詳しくは話したくありません。覚えていない、と言った方が正しいかもしれません。覚えていない、と言った方が正しいかもしれません。あの頃の私は、どのように毎日をご過ごしていたのか。震災からしばらくたったある日、母は私にこう言いました。

「あの時は二週間もしゃべらず、数ヶ月、全く笑っていなかったよ。まるで感情をなくしたみたいだった。」と。

私にすれば、母も同じでした。人を楽しませることの好きな母が、毎日涙を流し、笑わなくなっていたのです。私たちを襲った悲しみはとてつもなく深く、体に痛みを感じるほどでした。あの時の私

たちは、そんな悲しみの闇をさまよっていたのかもしれません。

震災から四年半。これまで様々なことを考え、ようやく落ちついた生活ができるようになってきた今、分かってきたこと、言えるようになってきたことがあります。それは、感謝の気持ちです。今まであたりまえに過ごしてきた、一日、一分、一秒。それは、決してあたりまえではなかったこと。突然、大切な人が目の前からいなくなつて、初めて気づいた感謝の気持ち。全てがあたりまえである時言えなかった言葉。「ありがとう」

毎日、畑でおいしい野菜を作ってくれたおじいさん。「ありがとう」。いつも優しい笑顔で迎えてくれたおばあさん。「ありがとう」。震災当日怖くて泣いている私に「大丈夫だよ。」と励ましてくれた妹のあーちゃん。「ありがとう」。「ほーちゃん大好き」と私に飛びつき、姉としての自覚を持たせてくれた弟のはる。「ありがとう」。あの時ちやんと伝えておけば良かった。「ありがとう」つて…。そんな後悔の念を感じつつ、今できること、あたりまえのことに感謝しながら、前を向いて生活していこうと思います。

あの震災は、あまりにも多くの大切なものを奪いましたが、そんな今だからこ言える「ありがとう」の言葉。

毎日、あたりまえに過ぎていく家族や友達との時間。このままあたりまえにやり過ごしていたら、私はきつと、人の気持ちを考えられない人間になつていたと思います。

だから私は、この先の人生を、全ての人、物、出来事に感謝の気持ち、言葉に、態度に、行動に「ありがとう」の気持ちを込めて、精一杯、胸を

張って生きていきます。これが犠牲になつた家族への恩返し、そして、感謝の気持ちです。

# 「祖母の分まで生きる」

石巻市立萩浜中学校

二年 阿部 龍斗

「家が、家がね、流されちゃった…ぜーんぶ流されちゃった!」

耳を疑うような母の言葉から一ヶ月後、家族四人で祖母の家に行くことになりました。

僕の母方の祖母は、よく笑い、よく食べて、よく話す、いつも明るい、まるで太陽のような人でした。僕が良い事をしたときは全力で褒めてくれ、悪いことをしたときは全力で叱ってくれる人でした。「誰とでも差別なく仲良くすること。人を傷

つけるような事は絶対駄目だよ。」こんな風に祖母は僕にたくさんのお話を教え、経験させ、学ばせてくれました。僕はそんな祖母が大好きでした。

震災で大怪我をして入院していると聞かされた僕は

「今日おばあさんに会える?まだ退院できないの?」

と何度もしつこく聞いていました。無言になる父と母に、何度も

「早く会いたい!」

と騒ぐ僕。すると助手席に座っていた母がゆっくりと後ろを向き

「おばあさん、津波で…死んじゃった…」

母の口から静かにゆつくりと出た言葉に、僕は一瞬何が起きたのか、母はなぜそんな事を言うのか全く理解できず

「嘘つき!そんな嘘つくなよ!」

泣き叫ぶ僕に

「ごめん…ごめんね…龍。ごめん。」

震えた声で話す母の目は今まで見たことのないとても悲しい目をしていて、窓に映った父の顔が涙

でくしゃくしゃになっていたのを見たとき、祖母は本当に本当に死んでしまったのかと、思いたく

なくとも、思わざるを得ませんでした。まだ九歳になつたばかりの僕は、あまりに悲しすぎる現実

にただただ泣き叫ぶことしかできませんでした。もつと話したいことがたくさんあつたのに…。も

つと教えて欲しいことがたくさんあつたのに…。祖母の死は僕に深い悲しみを与えました。

祖母を奪った海が憎くて悔しくて、見るのも嫌になり、友達と遊んでいても何をしても心から笑えない自分がいました。

そんな僕に母が

「龍が元氣ないから、おばあさんきつと悲しんでるね…きつと天国で泣いている。」

その言葉に、辛いのには僕だけじゃない、僕の笑つた顔が好きだと言ってくれた祖母に、これ以上僕の悲しんでいる姿は見せられない、そう思いました。

生きるという事は、決して幸せなことばかりではありません。今回の震災のように、生きたくても生きられなかつた命がたくさんあります。亡くなつた祖母はもつともつと生きてたかつたはず。だからこそ今がある僕たちは一人一人の命を精一杯生きていかなければいけません。ただこの世に存在するのではなく、せつかく授かつたこの命を無駄にしないように生きていきたいと、僕は思いま

す。

祖母のことを文章に書けるようになるまで、僕

には四年半の時間が必要でした。震災体験の風化が言われる今日、改めて震災を考え直したい、今の自分の気持ちを祖母や家族、友達に伝えられたらいいと思つたのです。家族が無事に生活できることがどんなにありがたいことか、思い出してほしいと思つたのです。

おばあさん、僕の声が聞こえますか。僕が見えますか。僕は毎日信頼できる家族や先生、大好きな先輩や後輩、仲間を支えられ、助けられ、毎日しっかりと生きています。毎日心から笑っています。だから安心してください。おばあさんの分まで、いつも笑顔を忘れず、まっすぐに、強く生きていきます。

## 五年後の今、思うこと

石巻市立桃生中学校

二年 佐藤 憂香

あの日のことは今でも鮮明に覚えている。未だに受け入れられない自分もいるが、五年の歳月は私にたくさんのことを教えてくれた。

降りしきる雪。揺れる景色。すぐ横で踊るように飛び跳ねる電信柱。当時九歳だった私は、その光景を眺めていることしかできなかつた。ただ、遠くで崩れてゆく建物が、日常の終わりを告げているように感じた。

その日、母は帰ってこなかつた。母と連絡がとれない、南浜町のいとこ家族はもう駄目だろう…。父や祖母が何を言っているのか分からなかつた。ただ、大変なことが起きている。それだけは感じていた。その日は水も電気もない、とても寒い夜だった。

二日後。母と、奇跡的に生きていたいとこ家族をつれて父が帰ってきた。

「避難先の中学校で合流できた。ただ…。」家は流された。叔父は野々浜から一晩中歩き蛇田に避難。叔母といとは後ろから津波が迫ってきたとき車を持ち捨て何とか助かったそう。一体何のことだろう。津波？避難？どこの世界の話だろうか。そうとしか思えなかつた。父は町の状況を一言でこう表した。

「地獄絵図」と。

電気も水もない中では、子供も水くみや買い物

と大忙しだったり、その合間にいとこも遊んだり。大人数での生活は大変ながらも、それまで味わったことのない楽しさがあった。そしてその生活は同時に、私達が失いかけていた大切なことに気づかせてくれた。

そんな生活が続いたある日。一週間ぶりの電気に家族全員で喜び合った。電気がつく。ただそれだけのことなのに。私はその時初めて日常の、「普通」の大切さを知った。普通に電気がついて、普通に家族がそろう。それがどれほど幸せなことか。一度失いかけて初めて気づくことができた。

それから水道が使えるようになると、徐々に生活は元に戻っていった。それはいとこ家族も同じこと。いつかは仮設住宅に引っ越さなければならぬ。喜ぶべきことなのに、少しさびしい気もした。一緒に暮らす中で生まれた絆も、また元に戻ってしまいう。それまでの短い時間の中で、私はいとこ達とたくさんの思い出を作った。

復興にあたって、たくさんの支援があつたことも忘れない。物資やメッセージ、そして元氣。これがいちばんうれしかったかもしれない。本当は何よりも誰かの優しさが、笑顔があつた必要だつたと思う。私もいつか必ず、何かの形で恩返しをしたいと思つた。

失つたものは大きかつたけれど、その分みんなが補つていった。全てがなくなつたけれど、ゼロからまたスタートした。一十一が、三にも十にもなつた。それは、地元の人々やボランティアの方々、そして日本中、世界中から届いた「絆」の力だと、今は思う。

あの日から、本当にいろいろなことがあつた。仮設住宅に引っ越したいとこ家族も休みの日には

帰ってくるようになった。数年間は会うことすらなかつたいとこ達。一緒に生活することもなければ、この先会うことも少なかつたと思う。絆の力は、今もまだ続いている。数ヶ月後に南浜町に行つた。何も無い南浜町を見たときは、もうあの町は戻つてこないのかと思つた。幼い頃見た景色も、通つた道も、いとこ遊んだ公園も。それならもつと大切に過ごしておけばよかつた。もつとたくさん思い出を作ればよかつた、後悔することもあつた。しかし町は、少し違った形でいつかまた姿を現す。まだ途中だけれど。

あの日から五年。実際に私は体験していないが、すぐ近くでは起こつていた。一分遅れていれば、一つ選択を間違えていれば、また違つていたかもしれない。悲しいこともあつた。でもきつと、悪いことだけではなかつたと思えるようになった。それはきつと、何も失つていない私だから言えること。震災があつたからとは言わない。ただ「復興」は、私達がなくしていた大切なことをたくさん教えてくれた。それを忘れてはならないと思う。これからは前を向いていかなければ。後ろばかり向いてはいけぬ。失つてからでは遅いから。いつなくしても後悔しないよう、その日、その時、その瞬間を、大切にしていきたい。たくさんの思い出を作つていきたい。人も、町も、日常も。

これから石巻はどう変わつてゆくのだろうか。願わくばそれがよい未来ではありますように。そしてこの先石巻がどんなに変わつていこうとも、人々の絆はいつまでも変わりませんように。